

第四百四回 青葉会 年忘れ句会

令和元年十二月九日(月)

新宿末廣亭(昼席) 見物↓午後五時半〜八時半 新宿「虎連坊」にて忘年句会

〈選者〉

◎ 川口孤舟

〈出席者〉

今井紀久男 柿崎忠彦 川口孤舟 佐藤忠重 在間千恵 星田啓子(句会のみ)

山田けい子(句会のみ)

《互選句》

五点

◎ すきま風忘れる芸や菊之丞

忠彦 (孤・千・重・啓・け)

四点

◎ 話芸に酔ひ酒にも酔ひて隙間風

孤舟 (紀・忠・千・重・け)

三点

◎ 歳末にちよいと浮かれて末廣亭

忠彦 (孤・重・啓・け)

◎ べらんめえ江戸の小喃寄席の暮

千恵 (忠・孤・重)

(下五↓暮の寄席)

師走寄席あの日も父母と笑ひけり

全 (紀・忠・啓)

寒風や人情嘶盛り上がる

孤舟 (紀・忠・千)

もう甘いか蜜柑熟れたか鳥に訊く

啓子 (紀・千・重)

二点

◎ 暮の寄席菊之丞の艶つぼく

紀久男 (孤・千)

風見鶏の大宰相逝く冬始め

全 (千・啓)

太神楽見事に決まり師走寄席

孤舟 (紀・け)

鮫鱈鍋ついさつきまで知らぬ人

全 (忠・啓)

年の瀬に寄席を樂しむ果報かな

忠重 (紀・啓)

一点

◎ 教皇の言葉噛みしめ開戦日

紀久男 (孤)

氷上の戦ひ熾烈王子伏す

千恵 (忠)

◎ 寄席熱し足元寒し隙間風

啓子 (孤)

出ばやしの音もはなやいだり歳の暮

忠重 (忠)

大仏の涙消す如煤払ひ

啓子 (け)

父の背に似てきた兄の冬構

けい子 (啓)

* * * * *

冬あたたか老(ラオ)朋友のカンパ来る

紀久男

年の瀬やトリの人情嘶受けてをり

全

子の注文応える二楽師走寄席(紙切り)

忠彦

クリスマスプレゼント捜して四苦八苦

忠重

年の瀬や笑ひ納めて句の席へ

全

令和元年十二月十三日

以上文責 紀久男



令和元年十二月 青葉会報

一、回覧は(一) 天牛さん、眞希子さんからのFAX。(二) 「俳句文学館」11月5日号掲載

載、俳人協会全国俳句大会特選・弘子さんの句「松手入れ松を貫き梯子立つ」(柏原眠雨選評)

「少なめに括る新聞秋の風」(西山睦 特選)。(三) 中日新聞11月25日掲載中日俳壇・

栗田やすし選「地酒酌む釣瓶落としの能登の海」秋元宏(S32入社・名古屋の社友)(選評

も)(四) 孤舟選者の作品掲載「丘の風」(三田俳句丘の会)(五) 300回記念合同句集(S23)。

S23)。

話題は天牛さん、正明さん・猛さんの恢復状況や竹橋ビル等々。

どうぞ佳いお年をお迎え下さい。

令和元年十二月十四日

紀久男記